

特116

954

橘旭翁作譜

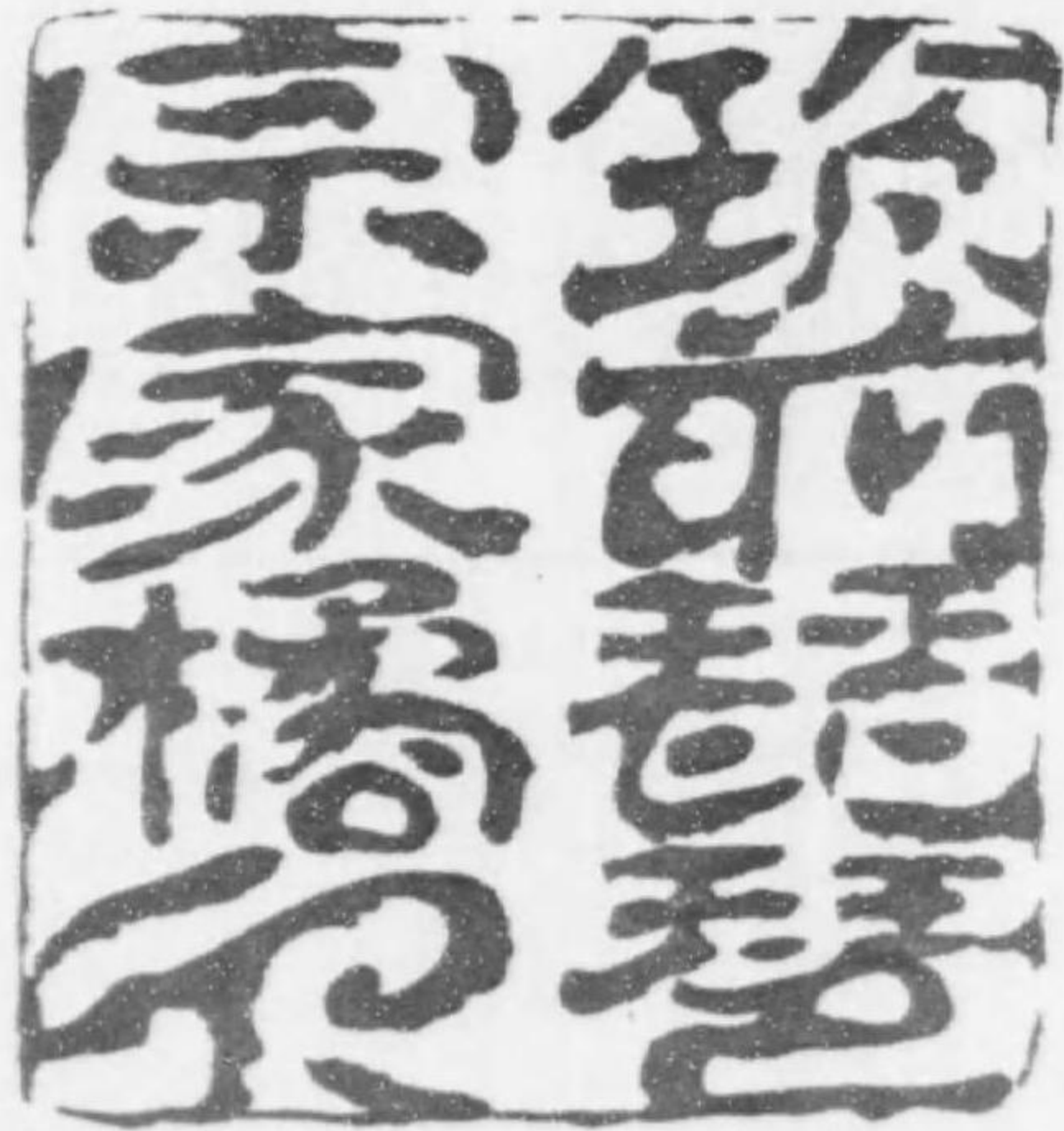
小督



始



特 116  
934





五時の相國清盛の

三身は數どしも思はねど

三君の御為に悪がなと

五間をたより宋意なも

三されば君の御なげき

三怨めるよしを聞給ひ

一われのままに仕なば

七心定めて烏羽玉の

三内裏を刃心び出たまふ

世に譬ふべき物もなく

五晝はひめす夜はまぶら

二他の袂も朽ぬべし

中月は澄めども御涙に

三かにかに仲國承まはれ

三片折戸せし賤が家に

三惱ませ給おんありさま

上折しも中秋三五の夜

下御聲いと曇らせたまひ

三小督は嵯峨のわたりなる

四刃心び居るよし聞きつるが

四 汝是より赴きて

尋ね来よとて仰せける  
四番

四 されば彈正の大弼仲國は

五 寮の駿馬に跨りつ水

六 夜かて出づるや秋の夜の

上夏 月毛の駒よ心して

中 雲井にかけし時の間も

下 急ぐところのゆくかな

六 露は玉屑に和して

金盤冷やかに

五 月は珠光を射て

貝闕寒しとかや

七 在五の主の男鹿なく

六 其山里と詠じけん  
三  
四番

四 嵯峨のわたりの秋の夜を

命とすたく虫の音と

上秋 ともいすみゆ月のかけ

中 地上の星と見ゆるまで

下 光るは露か玉鉾の

上春 道の栞もたえたらば

中 真萩 はぎ 子 こ す す き き なる なる 茅 かや を

六 さちの賤 しづ が家 や こちの門 かど

四 法輪 はふりん の方 かた へこころ こころ ぶし

三 悼 いた まし まし や小督 こがう の局 つぼね ね

三 日數 ひかず も も こころ こころ へなる なる 郷 さと の

下 馬 うま の蹄 ひづめ に踏 ふみ した した き

五 尋 たづ ね ね わ わ び び つ つ 仲 な 國 くに は

五 徐 しづ 々 々 馬 うま を を ぞ ぞ う う た た せ せ ける ける

三 内裏 ないり を を 出 いで せ せ 給 たま へ へ て て よ よ り

二 名 な 残 ごり の露 つゆ に袂 たもと さへ

三 乾 か く く ひ ひ ま ま な な き き 物 もの 思 おも ひ

六 豫 か へ へ て て こ こ ろ ろ に に 期 ご し し 給 たま へ へ ば

三 主 ぬし の妻 つま の の 乞 い ぶ ぶ が が ま ま 。

四 座 ざ に に 就 つ き き 給 たま へ へ 時 とき し し も も あ あ れ

上冬 塵 ちり と と 見 み る る べ べ き き 物 もの も も な な し

七 明 あ 日 ひ は は 大原 おほはら の の 別 べつ 所 しょ へ へ と

五 今 こ 宵 よひ 限 かぎ り り の の お お かれ かれ ぞ ぞ と

三 琴 こと 取 とり 出 いで て て 端 はし 近 ちか く

四 月 つき は は 天 てん 心 しん に に 澄 す 昇 みの り り て

中 律 むすし が が 下 もと の の 虫 むし の の 音 ね も

下 秋や恨むる戀や憂き

初音

中 我も浮世のまがの身ぞ

一 搔なす琴のおのづから

三 峰の嵐か松風か

四 駒をどめて聞くほどに

上 春 何をかくねる女郎花

下 人に語るも恥かしく

二 遠音はききて通ひ来る

三 尋ねる人の琴の音が

五 爪音しるき想夫戀心

四 さびこそ小督の局ぞと

三 聞しがごとき片折戸

二番

四 彈正の犬弼仲國に候ぞ

三 音なむ聲は良ありて

七 賤が伏屋に内裏より

四 馬より下りて窺がへば

四 是は宣旨の御使ひ

四 昔を聞かせ給かごと

四 細目開けし女の童

上 春 何の宣旨のあるべきぞ

十番

中 所や違ひ侍りなると

下 聞つ折戸を押開は

四 仲國はつと内に入り  
五番

三 などで隠せ給ふぞや  
金

四 御身の失踪を給ひてま

四 君には供御もきこゝめ  
されず

三 夜も眠らせ給はごそ  
水

五 畏れども御壽命を  
く

三 爲に縮ませ給はらん  
一号

六 はの空をまおぼめさば

五 御書御覽候らへと  
金

四 女の童して参らすれば  
番

七 小督は御書頂き給ひ  
水

露 目には涙の玉櫛笥  
呼子

三 ふたび三度繰かへし

三 ついに泣き伏し給ふぞ  
土

三 理せめて哀れなれ  
三号

三 斯て小督の局は  
土

四 暫くありて御返しを

三 やうく認め給ひが



四 仲國は更に喜ばず  
なかくに さら よろこ

四 餘人ならば兎も角も  
よじん と かく

四 春花の朝秋月の夕  
しゆんくわ あしたしうげつ ゆふぐ

三 御琴遊ばれし其砌  
おんこと あそ その みきり

五 笛の役にと召されは  
ふえ やく しめ

四 仲國にては候らはずや  
なかくに さふい

六 數ならぬ身もしかすがに  
かず み

五 得ては忘れ給ふまじ  
あ わす たま

四 御目知らん其れまは  
おんめ

三 柴垣の根に片敷て  
しば ね かつたしき

四 月下に夜を明さん  
げつか ひよあ

上 秋 かくてはあすか女氣の  
あき めんなぎ

中 小督もあはれ思は  
ちゆう せうとく

下 さくらば通らせ給は  
した さくらば とほ たま

三 物數ならぬ自らを  
ものかず みづか

二 かくまで思はせ給ふこと  
おも 五 たま 三

三 世におまはなま事ながら  
よ おまはなま こと

三 そこにも聞せ給いなん  
きか 二

五 入道殿のよなうも  
にふだんどの

三 怨みを會ませ給ふよ  
うらみ 三

一 乳上

二 この身の上は厭はねど

三 我が大君の為ならずと

五 儲こそ思ひ出でしなれ

九番

七 淵にも瀬にも身を投て

五 はや鬼も角もなれたんと

三 今日までながら侍りしは

三 うたてや戀の執着心

六 明けなば大原の別所と

五 思ひ起して候らへば

三 斯くは一曲弾しぬと

三 小督の言葉葉仲國は

二 表衣の袖を絞りの

二十号

四 大原の別所とあるからほ

三 御落飾の御心にや

十九号下

四 君の御許しなき内に

五 いかでか去る事の叶ふき

四番

四 重ねて参り候ふまで

四 思ひとまらせ給へかし

三番

六 早や夜も更には候は

五 君にも待かね給ふらん

水地

六 さらばと計り苟の 夏 別れの袖の虫の音も

中 しめりかちなる白露の 下 いと濃やかな夜は更で

五 五更の空に鳴る鞭は 五 都の方へぞ消えにけむ

三 都の方へぞ消えにけむ

大正三年五月二十八日印刷  
大正三年五月三十一日發行

定價 金貳拾貳錢

發行者 兼 橋 一 定  
東京市麴町區一番町三十二番地

印刷者 畑 中 爲 之 助  
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光印刷株式會社  
東京市麴町區一番町三十二番地

發行所 橋 筑 前 琵琶 宗 家

著作權 所有 不許複製  
橋 筑 前 琵琶 宗 家

264  
188

終

